

大学院特別講義のご案内

- ◆日時：2020年1月24日(金) 17:30～19:00
- ◆場所：F棟4F 大学院セミナー室
- ◆講師：今村佳樹教授 (日本大学歯学部口腔診断学講座)
- ◆演題：特発性口腔顔面痛
- ◆概要：歯科の領域では、非歯原性歯痛という診断名が教科書にも掲載されるようになったが、この名称は、歯髄や歯周組織以外の組織に由来する痛みを総称した便宜的な呼称であり、正式な疾患名ではない。原因不明の意味で用いられる疾患名としては、「非定型」、「症候性(広義)」を冠した疾患名があり、原因が推測できる病態には「二次性、症候性(狭義)」を冠した診断名が用いられるべきであり、この二次性の病態が除外されたものに対して、「特発性」を冠した疾患名が適している。したがって、特発性口腔顔面痛とは、口腔顔面に疼痛を訴える病態で、他の既知の疾患、病態を除外して残った、診断のつかない痛みの総称ということになる。そこで、本講義では、特発性口腔顔面痛の診断アルゴリズムとその位置づけを当講座の研究データを交えながら考えてみたい。

抄録 今回は、口腔顔面痛に関する疾患名を一緒に考えたい。歯科の領域では、非歯原性歯痛という診断名が教科書にも掲載されるようになり、国家試験にも出題されるようになった。開業歯科医から大学の口腔顔面痛外来への紹介症例でも、原因不明の歯痛に対して非歯原性歯痛という診断名がつけられていることが多い。しかしながら、この非歯原性歯痛という名称は、歯髄や歯周組織以外の組織に由来する痛みを総称した便宜的な呼称であり、正式な疾患名ではない。また、原因不明の疼痛を呈する病態を指す呼称でもない。原因不明の意味で用いられる疾患名としては、「非定型」、「症候性（広義）」を冠した疾患名があるが、原因が推測できる病態には「二次性、症候性（狭義）」を冠した診断名が用いられるべきであり、この二次性の病態が除外されたものに対して、「特発性」を冠した疾患名が適している。一方、「二次性」に対応する「一次性、原発性」という冠名称は、その臓器由来の疾患であることを意味し、その病態のメカニズム自体が解明されているか否かには関わっていない。

さて、特発性と冠された病態は、いわゆる除外診断であることから、原因が解明されていない複数の病態が集合した症候群を包括した呼称である可能性がある。特発性口腔顔面痛となると、口腔顔面に疼痛を訴える病態で、他の既知の疾患、病態を除外して残った、診断のつかない痛みの総称ということになる。一方、この診断のつかない病態の中でも、症状、特徴の類似した病態を取りまとめて一つの症候群として名称を付けたものが、持続性特発性歯痛（PIDAP）、口腔灼熱症候群（BMS）などの疾患（症候群）ということになる。過去には、これらの説明のつかない痛みを心因性疼痛として扱う傾向にあった。近年、これらの疾患を神経障害性疼痛の観点から説明しようとする試みがなされているが、これらの特発性口腔顔面痛疾患では、神経障害の既往が証明できないことが特徴であり、神経障害性疼痛の診断基準を満足しえない。しかしながら、神経障害性疼痛と共通の性質を呈するものが多く、2016年にnociceptive painという新しい概念が発表されるに至った。この病態は、口腔顔面領域に限らず、線維筋痛症など全身の疼痛に共通するもので、特に中枢の疼痛制御機構の異常が疑われるものである。口腔顔面痛の代表的な特発性疼痛の一つであるBMSはこのnociceptive painに共通する特徴を満たしており、全身の特発性疼痛の中にはこのnociceptive painでカテゴライズできる種類の疼痛が含まれる可能性がある。

今回の講演では、特発性口腔顔面痛の診断アルゴリズムとその位置づけを当講座の研究データを交えながら考えてみたい。